

報告者と報告タイトルは下記の通りである。

なお、詳細については日本人口学会編『人口学研究』古今書院を参照のこと。

1. 丸山洋平（札幌市立大学）「福井県高浜町の人口移動と家族形成—原発関係労働者の就業移動の影響」
2. 工藤 豪（日本大学）「地方自治体の結婚支援における特徴と課題」
3. 佐々井司（国立社会保障・人口問題研究所）「外国人人口の動向と多文化共生の地域づくりに関する一考察」
4. 松田茂樹（中京大学）「アジア諸国における少子化の特徴と背景要因」

本部会では、行政担当者や大学院生を含めた若手研究者の参加も少なくない。学際的で自由な議論ができることが本部会の特徴といえよう。（佐々井 司 記）

## モロッコ王国アカデミー第46回会合

2019年12月16～17日に、モロッコの首都ラバトでモロッコ王国アカデミー第46回会合が開催された。モロッコ王国アカデミーは、1980年に創設された、モハメッド6世国王の直属機関であり、モロッコにおける最高位の科学文化研究交流機関である。近年の年次会合では、世界の地域をテーマに2017年はアフリカ、2018年はラテンアメリカに関して開催されており、2019年の第46回会合はアジアをテーマとして開催された。アジアのうち、中国、インド、日本についてそれぞれセッションが行われ、「思考の水平線としてのアジア—日本における近代化の経験」と題するセッションで、筆者は日本の近代化と人口政策に関する講演を行った。

会合では、モロッコの日本研究者に加え、日本における名だたるイスラーム研究者である森本公誠東大寺長老や山内昌之東京大学教授が、日本の社会改革の先鞭をつけた例として聖武天皇、徳川家康を取り上げるなど、「近代化」というテーマにとどまらない比較文明論の展開があった。

会合の後には、モロッコの高齢者施設や保健省人口局を訪問した。モロッコの合計特殊出生率は2018年で2.38に低下し、女性の進出と共に今後さらに低下すると見込まれている。急激な出生率の低下に伴い、人口高齢化のスピードも速く、65歳以上人口割合は2018年で7%と高齢化社会に突入り、今後22年で14%になると予測されており、日本よりも早いスピードで高齢化が進行することとなる。モロッコではアジアの高齢化が進む国・地域と同様、高齢の親は家族で見るのが通例であり、地域をベースにした高齢者ケア支援のあり方が模索されている。（林 玲子 記）

## オックスフォード大学シンポジウム「総務省統計局における利用可能データとリソースについて」

2020年1月9日、オックスフォード大学ナッフィールド校（Nuffield college）にて、同大学社会学部 GenTime プロジェクト、日本学術振興会ロンドンオフィス、英国経済社会研究会議（Economic and Social Research Council）の共催によるシンポジウム「総務省統計局における利用可能データとリソースについて（Introduction to Data and Resources Available at Statistics Bureau Japan）」が開催された。筆者は翌10日より同校で開催されるワークショップに参加する予定であったことから、

本シンポジウムを聴講する機会を得た。シンポジウムでは、独立行政法人統計センター前理事長・統計数理研究所所長の椿広計教授によるオンラインによる個票データ利用の紹介、同センター・白川清美博士による匿名データの紹介に続き、お茶の水女子大学・永瀬伸子教授と首都大学東京大学院生で日本学術振興会特別研究員の柳下実氏による公的統計の個票データを用いた研究事例が紹介された。オックスフォード大学内外の日本研究者を中心に50名程度の参加者があり盛況であった。当日のプログラムについては、以下 URL を参照されたい。

<https://januarysymposium.github.io/programme.html>

なお、GenTime プロジェクトでは、統計センターが提供する日本の匿名データを利用するため、社会学部研究室内にデータセンターを開設する予定とのことである。日本の公的データには海外からも高い関心が寄せられており、今後はオンラインや匿名データを利用した海外研究者らによる研究も増えていくものと思われる。(福田節也 記)

## オックスフォード大学国際ワークショップ「東アジアの3世代同居世帯における生活時間とライフコース移行」

2020年1月10-11日にかけて、オックスフォード大学ナッフィールド校 (Nuffield college) にて、同大学社会学部 GenTime プロジェクト (研究代表者: Man-Yee Kan オックスフォード大学社会学部准教授) 主催による国際ワークショップ「東アジアの3世代同居世帯における生活時間とライフコース移行 (Time Use and Life Course Transitions in Multigenerational Households in East Asia)」が開催された。本研究所からは、筆者の他、同大学社会学部に研究滞在中の国際関係部・余田室長が参加した。また、テーマが日本、韓国、中国 (及び香港) を対象としたものであったことから、永瀬伸子教授 (お茶の水女子大学) による結婚後の親子同居に関する分析や社会生活基本調査の匿名データを用いた夫婦の性別役割分業についての分析 (Ekaterina Hertog and Man-Yee Kan) や高齢者介護についての分析 (Kamila Kolpashnikova and Man-Yee Kan) など日本についての報告も多く寄せられた。筆者と余田室長は以下のタイトルで報告を行った。

Setsuya Fukuda, A Decade of Change? Trends and Determinants of Domestic Chores among Japanese Fathers in 2001 and 2010

Shohei Yoda, Multigenerational Living Arrangements and Marital Fertility in Japan: A Counterfactual Approach

なお、筆者はこのワークショップの後、1週間ほどオックスフォード大学に滞在し、GenTime プロジェクトをはじめとする同大学の研究者との共同研究について打ち合わせを行った。本ワークショップでの報告とその後の研究滞在は、英国 ESRC (Economic and Social Research Council) と AHRC (Arts and Humanities Research Council) とのジョイントコールによる日英研究協力グラントによる助成を受けた。プロジェクト代表の Kan 教授に感謝申し上げる。(福田節也 記)